

国産鶏肉1割安

ブラジル産3割上昇

年初比、価格差が縮小

鶏もも肉の国産品と輸入品の取引価格の差が縮まっています。高価格で量販店や精肉店で空揚げなどの材料として売られる国産品は今年に入ってから1割下落。対照的に、

コンヒニの弁当や外食向けに主に使われるブラジル産は3割上昇している。量販店や外食業の収益に影響を与えそうだ。東京地区の国産品の卸値(正肉、加重平均)は



国産ブロイラーの買い付けは鈍い

1月6.15円前後。今年の最高値の1月上旬時点と比べ64円(9%)下がった。生産量の増加に加え梅雨時の不需要期を迎え買い付けが鈍った。東京地区の4月の消費者物価調査によると、国産もも肉の小売価格は1



0.04130円で、前年同期に比べ3円安い。一方、輸入品の9割を占めるブラジル産もも肉の取引価格は1月320円前後。1月上旬時点と比べると65円(25%)高い。ロシアなど新興国の引き合いが堅調なことから、ブラジルの生産者が対日輸出価格を引き上げているもようだ。ただ、中国・タイからの加熱加工品の輸入量は増加傾向。「需給が緩み輸入品の上値を抑える可能性はある」(食肉輸入商社)との声もある。